

京大 広報

KYOTO UNIVERSITY



※ P6261 参照



※ P6278 参照



※ P6256 参照

2026.1
No. 786

目次

[巻頭言]

新しい年を迎えて
総長 湊 長博 6256

[大学の動き]

- 国際卓越研究大学の認定候補に選定 6260
- 第20回京都大学ホームカミングデイ2025を開催 6261
- 留学生イベント「Meet the Senpai: Stories Beyond KyotoU」を開催 6263
- 令和7年度「STEM girl ～中高生のための理系女子 mixer～」を実施 6264
- 生理用品設置支援事業を開始 6266
- 令和7年度「人権に関する研修会」を開催 6266
- 定年退職予定教員 6267

[部局の動き]

- フィールド科学教育研究センターが、京都情報大学院大学および京都コンピュータ学院と連携協定を締結 6271
- 宇治キャンパス若手研究者交流会を開催 6272

[寸言]

AI時代の企業と大学 小島 啓二 6274

[随想]

点滴穿石 共創 多くの仲間と共に
名誉教授 橋田 充 6275

[洛書]

先達の知見 樋口 裕美子 6276

[榮譽]

- 野田 進 高等研究院副院長・特別教授がランク賞を受賞 6277
- 川合康三 名誉教授が日本学士院会員に選定 6277

[話題]

- 学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会 iGEM で金賞を受賞 6278
- 令和7年度総長杯ボウリング大会を開催 6278



京都大学

所屬・職名については、行事開催時点のものです。

巻頭言

新しい年を迎えて

総長 湊 長博



新年あけましておめでとうございます。

昨年一年を振り返ってみますと、初夏から晩秋にかけて本当に暑い日が続きました。京都では気温が35度を超える猛暑日が61日にもものぼり、世界の平均気温も0.48度上がったそうです。カリフォルニアをはじめとする世界各地では大規模な山火事が発生するなど、地球温暖化が予想以上の速度で進行していることを、改めて思い知らされました。また世界では約4年前に始まったウクライナの戦乱が続く中、昨秋には、本学のウクライナ危機支援基金による第4陣となる留学生約20名を受け入れました。これで受け入れ留学生の総数は、延べ約70名になります。今年こそはこの戦乱が終結して、かの地に平和と安全が戻り、学生たちが安心して故国に戻るようになることを願ってやみません。

他方、本学では大変おめでたいことが続いた良い年でした。

3月には、柏原正樹 数理解析研究所特任教授、高等研究院特定教授が、数学のノーベル賞とも言われるアーベル賞を受賞されることが決定し、5月にノルウェーでその栄誉が授けられました。10月には、北川 進 理事・副学長、高等研究院特別教授のノーベル化学賞受賞決定の知らせに沸き上がったところです。

去る12月10日には、ストックホルムでノーベル賞の授賞式が挙行されました。私も出席させていただきましたが、北川先生がスウェーデンのグスタフ国王からメダルとディプロマを授与されるのを目の当たりにし、大変誇らしい気持ちになりました。私自身は本庶 佑 高等研究院特別教授がノーベル生理学・医学賞を受賞された2018年以来、7年ぶり2度目の授賞式でしたが、やはり格別の感動でした。海外での本学の存在感も一段と高まったように感じています。同時にノーベル生理学・医学賞を受賞された坂口志文 大阪大学特別栄誉教授も本学の卒業生であり、これで本学ゆかりのノーベル賞受賞者は13名となりました。

これも、自由の学風のもとで独創的な研究を尊ぶ、という本学の歴史的な伝統の所産であり、この気風を次世代に引き継いでいくことが、私たちの大きなミッションであると改めて感じている次第です。

しかし何といっても最大の動きは、国際卓越研究大学への再申請に向けて、全学的な議論と準備を進めてきたことだと思います。一昨年の春からこの議論を詰めてきて、丸一年間にわたる準備を経て、昨年の5月に研究等体制強化計画を文部科学省に提出いたしました。

その後、夏から秋にかけて文部科学省の有識者会議（アドバイザーボード）によるヒアリングと現地調査を受検しました。この間、多くの教職員や学生の皆さんにもご協力をいただき、

巻頭言

非常にありがたく思っております。

このような申請・審査を経て、昨年12月19日に文部科学大臣から、本学は国際卓越研究大学の認定候補として適当であるとの選定を受けました。アドバイザーボードからの意見書の中で、本学の研究等体制強化計画は、「歴史や伝統のある大規模な大学として、一定の改革の困難性がある中で、今回極めて挑戦的な改革構想を掲げていることを高く評価したい」という大変ポジティブな評価をいただきました。そのうえで、認定候補大学として重要な確認事項について、アドバイザーボードとの対話を踏まえながら、最長1年以内に計画を磨き上げたうえで、正式な認定・認可へ移行すべきである、とされています。

アドバイザーボードからの確認事項は2点あり、一つ目は各部門の研究力強化戦略などを検討する基となる京大ビジョン(全学計画)を策定するということ。そして二つ目は、その京大ビジョンに沿って全学における部門制への移行を、スピード感を持って進めるということです。これらについて、新年早々から全学ベースで準備に入りたいと思っています。

コアとなる京大ビジョンは、「自由な研究環境のもとで、社会を変革する価値とグローバルに活躍する高度人材を生み出し続け、世界から多様な研究人材が集う知の拠点を旨とする」ことに集約されています。これを実現するための体制強化計画は、三つの柱からなります。

1. 卓越した独創的な学術研究成果を生み出し続けることのできる研究体制の構築

将来にわたり、先端的な研究から多様な学術成果を生み出し続けていくには課題もあります。そのため、研究組織体制を欧米のグローバルスタンダードな形態に変えていきたいとするのがこの1点目です。

2. アカデミアのみならず、多様な社会でグローバルに活躍できる高度人材を輩出する教育システムの形成

国内外の優秀な入学者を高度人材として養成し、グローバル社会へ輩出していく人材育成の仕組みを強化していきたいというのが2点目です。

3. 大学の学術成果を社会・経済的価値につなげ、大学独自基金の拡大と学術研究への再投資のエコサイクルによる、自立的財政基盤の実現

研究成果を社会に実装した後、社会からの信任を得ることで学術研究へ再投資するサイクルを実現していきたいというのが3点目です。

この体制強化計画の中心となるのが、部門制の導入による研究組織の改革です。これまで京都大学は、わが国を代表する研究型大学として大きな成果を上げてきましたが、昨今、教員・研究者、とりわけ次世代を担う若手教員・研究者の多くが、研究時間が不足している、研究支援や高度な研究設備の共用化などが進んでいない、あるいは独立した研究者としての自立化に障壁があるなど、現行の研究体制や研究環境に大きな困難を感じていることがアンケート結果から明らかになっています。このような状況は、独創的な学術研究をミッションとする本学の将来にとって、深刻な懸念材料であると言わざるを得ません。

巻頭言

これらを抜本的に改革していくためには、大学全体が変わっていかないとはいけません。まずは研究組織のあり方について、明治時代以来続く閉鎖的な小講座制からオープンな部門制へ転換する必要があります。研究領域、すなわち個人がどのような領域で研究をするか、あるいはどのようなミッションで研究するかに基づいて国際標準のグループを作り、協働して特定の目的のために研究するという体制に移行していくことを全学で合意してきました。欧米ではこのグループを部門と呼びますし、ヨーロッパの一部の大学、例えばボルドー大学などでも柔軟に運用されていると聞きました。従来のように、教授のもとに少人数の研究室体制を設けるのではなく、ディシプリンやミッションごとに研究者が協働する体制を作るのが部門制です。研究組織をこのような部門へ変えていくことをテコとして、大学院を中心とする研究のあり方、また教育や事業財務戦略、さらには大学全体のガバナンス体制等々、全ての大学組織の改革を進めて、最終的に少なくとも四半世紀後には、真に国際的な卓越研究大学として確立することを目指していくのが、今回の体制強化計画です。

本日は職員の方々も多く参加いただいておりますが、この計画達成に重要なのが全学の業務改革です。大学の機能の多様化と複雑化に伴って、必要とされる業務も極めて多彩かつ専門的になってきており、教員、事務職員、専門職というような職種縦割りではもはや立ち行かないことは、皆さんよく理解され、日々認識されていることでしょう。

かつて、教職というのは車の両輪であると言われてきました。片方の車輪が教員、もう片方の車輪が職員で、異なる機能を持つ両者が相互連携し、大学を運営していくものだと考えられていたわけです。しかし、これだけでは大学の業務は必ずしも立ち行かない局面にきています。今回の体制強化計画では、全学の業務組織に対し、研究を支援する組織、教育を支援する組織、財務や事業を展開する組織など、目的や機能別に再編し、その中で教員、事務職員、専門職、URA、技術者など多様な職種の人たちがフラットに連携して、効果的に協働作業を進められる組織が望ましいと考えました。

そのためにも人への投資を強力に進めていく必要があります。現状では人材が足りていません。必要な人員を補充し、適切に処遇して組織の効果・効率を高めていくことが重要であろうと思います。

結びに、今年は国際卓越研究大学の認定候補として、アドバイザリーボードからの指摘に迅速に対応し、できる限り速やかに国際卓越研究大学の正式な認定、認可を受けて、体制強化計画を実行に移すということを進めていく年になります。

ついては、新年度を待たずに速やかに京大ビジョンを明文化して全学で共有し、それに基づいて部門編成の具体的な動きに入っていただきたいと思います。どのような部門構成にするかは、まずは学系を中心に検討を進めることになるでしょうが、必ずしも学系とイコールである必要はありません。現在の学系のように単なる人事上の区分ではなく、研究の母体としての部門を作っていくには、相応のプランニングが求められます。各部門をどのようなビジョン、あるいはミッションに基づいて研究を実施していく形態にするかということを実体化する作業に入っていただきたいと思っております。

私の総長としての年頭挨拶は、今回が最後となります。

巻頭言

これまで、理事・プロボストとして6年、総長として5年強、大学改革に努めてまいりましたが、今年こそ国際卓越研究大学へ向けて真の出発の年になることを願っております。ぜひそのためにも全ての教職員の皆さんが一致協力して、向こう四半世紀をかけて着実に大学の構造改革を進め、大学の自立と自由の確立のために、真摯に着実に取り組んでいただくということを心からお願いして、私からの新年のご挨拶に代えさせていただきたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

(2026年1月6日(火)、全学職員向け「総長年頭挨拶」より)

[目次に戻る ↗](#)

国際卓越研究大学の認定候補に選定 Screening results for the Japanese government's Universities for International Research Excellence program

2025年12月19日(金)、本学が国際卓越研究大学の認定候補となることが適当であるとの審査結果が文部科学省より公表されました。これを受けて、湊 長博 総長から教職員に対してメールで以下のメッセージが送られました。

湊長博 総長からのメッセージ

本日、京都大学は国際卓越研究大学の認定候補となることが適当であるとの審査結果が公表されました。

国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議（アドバイザリーボード）における審査の結果、本学の計画は、極めて挑戦的な改革構想を掲げているものとして高く評価されました。

そのうえで、各部門の研究力強化戦略等の検討の基となる「京大ビジョン」の策定や全学における「部門制」への移行状況の確認が必要であるとされ、認定候補大学としてアドバイザリーボードとの対話を踏まえながら最長で1年間計画を磨き上げることとなりました。

本学としては、国際卓越研究大学の認定等に関する有識者会議（アドバイザリーボード）の意見を踏まえ、「京大ビジョン」の策定と「部門制」への移行を加速させることにより、国際卓越研究大学としてできるだけ速やかな認定を目指していく所存です。

自由な研究環境のもとで、社会を変革する価値とグローバルに活躍する高度人材を生み出し続け、世界から多様な研究人材が集う国際的な知の拠点を目指す取り組みに向けて、教職員の皆さまのご協力をお願いいたします。

令和7年12月19日
総長 湊 長博

(A message from President Nagahiro Minato)

Today, the screening results for the Japanese government's Universities for International Research Excellence program were announced, confirming Kyoto University as a suitable candidate for accreditation. In the review by the Advisory Board, the university's proposal was highly evaluated for presenting an extremely ambitious vision for reform.

It was noted, however, that it is necessary to monitor the formulation of the "KyotoU Vision," which will serve as the basis for each department's research strengthening strategies, and the progress of the university-wide transition to the department system. As a candidate university, therefore, Kyoto University will spend up to one year refining its plans in consultation with the Advisory Board.

Based on the Advisory Board's feedback, Kyoto University will accelerate the formulation of the KyotoU Vision and the transition to the department system in order to achieve accreditation as a University for International Research Excellence as quickly as possible.

I ask for the cooperation of all faculty and staff members to help ensure that Kyoto University, through its free and open research environment, will continue to generate transformative value for society and cultivate highly-skilled globally-active human resources, functioning as an international hub of knowledge and a destination for diverse researchers from around the world.

December 19, 2025
Nagahiro Minato
President

【関連リンク】

<https://www.kyoto-u.ac.jp/sites/default/files/inline-files/takuetsu-daiichiji-c1720db3fc7cf29953a2648522f1cff2.pdf>

https://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/mext_01580.html

(総長オフィス)

[目次に戻る ↗](#)

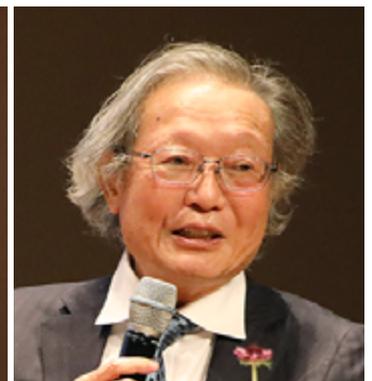
第20回京都大学ホームカミングデイ 2025 を開催

第20回ホームカミングデイ 2025 を2025年11月1日(土)に開催し、秋晴れが広がる中、同窓生(卒業生、修了生、元教職員)、教職員、学生、一般の方など延べ5,874名が参加しました。本イベントは、今回で20回目の節目となります。

百周年時計台記念館百周年記念ホールでは、午前に柏原正樹 数理解析研究所特任教授・高等研究院特定教授がアーベル賞を受賞したことを記念する対談が、午後に音楽会が開催されました。湊 長博 総長による開会挨拶の後、記念対談の共催者である石毛和弘 日本数学会理事長による挨拶に続き、今年、日本人で初めてアーベル賞を受賞した柏原特任教授とサイエンスライターの吉成真由美氏による対談が行われました。「数学とは何か」、「数学の美しさ」、「数学とAI」を軸にトークを展開し、柏原特任教授の半世紀にわたる研究人生が多角的に語られました。午後からの音楽会では、京都大学交響楽団、グリークラブ、京大合唱団同窓会



湊総長の挨拶



柏原特任教授

大学の 動き

が出演し、クラシックからポピュラーまで幅広い演奏や歌声を披露し、盛況となりました。

同館2階の国際交流ホールでは、三井住友銀行より講師を招いての「人生100年時代」の資産活用セミナーや、本学の研究者と参加者が直接対話できる「京都大学アカデミックデイ×ホームカミングデイ2025」、1階京大サロンでは、京都大学機械研究会のロボット実演、京都大学書道部OB展の作品、KUON短歌コンテストの作品を展示した「展示サロン」が開催されました。

国際科学イノベーション棟では、20周年記念企画として、「あの奇才もあの天才も～20年ぶりの再集合～」と題し、2000年代以降の卒業生・修了生と現役京大生を対象にした座談会・交流会が開催されました。座談会では、文筆家のpha氏（総合人間学部・2003年卒）、起業家の櫻本真理氏（教育学部・2005年卒）、柴田 悠 人間・環境学研究科教授（人間・環境学研究科・2011年修了）の3者がざっくばらんに語り合いました。交流会では、登壇者と参加者が年代や領域を超えて親交を深めました。ほかにも、関連イベントとして現役留学生と卒業留学生がつながる交流イベント「Meet the Senpai」を初開催し、17ヵ国からの参加者がありました。

屋外のクスノキ周辺で開催した「くすのき逸品マルシェ」では、附属農場・牧場や卒業生ゆ



柏原特任教授と吉成氏の対談



京都大学交響楽団の演奏



展示サロンの様子



20周年記念企画の様子



スタンプラリーの様子



マルシェの様子

大学の
動き



キャンパスの様子

かりの企業など16ブースが出店し、それぞれ自慢の品々が販売されました。各ブースがにぎわい、ほぼすべての商品が早々に完売しました。また、例年好評となっている総合博物館、附属図書館、尊攘堂、清風荘の特別公開も行ったほか、クイズに答えながら各施設を回るスタンプラリーも開催し、本学の卒業生・在学生以外にも、近隣住民の方々や子どもたちなどが本学の歴史や研究

に触れながら楽しそうに学内を巡っている様子が見られました。

次回のホームカミングデーは、2026年11月7日(土)に開催する予定です。

(成長戦略本部)

[目次に戻る](#)

留学生イベント「Meet the Senpai: Stories Beyond KyotoU」を開催

本学では、今年度より、世代を超えた留学生間のネットワーク構築の支援を目的として、各国留学生団体との共催により、現役留学生(後輩)と卒業留学生(先輩)がつながるイベントシリーズ「教えて先輩! 卒業後の進路、そのリアル」を展開しています。

その拡大版となる「Meet the Senpai: Stories Beyond KyotoU」を、2025年11月1日(土)に総合研究8号館3階NSホールにおいて、第20回京都大学ホームカミングデーの一環として京都大学生協留学生委員会(KUISC)との共催で開催し、17ヵ国から65名が参加しました。

はじめに、成長戦略本部による本イベントの趣旨紹介が行われました。続く第1部のトークセッションでは、多国籍の卒業留学生(研究者、グローバル企業社員、起業家)が登壇し、ピッチトークとして、それぞれがキャリアを歩む中でどのような選択や転機を経て現在に至ったのかなどを率直に語りました。続くパネルディスカッションでは、モデレーターが体験談を掘り下げ、パネリスト同士のコメントを交えながら多角的に議論を展開し、最後はコメンテーターが総括しました。



トークセッションの様子



パネルディスカッションの様子

大学の
動き

第2部のネットワーキングセッションでは、卒業留学生と現役留学生が交流しました。卒業留学生を現職の属性により6グループ（各2名）に分け、KUISCの学生モデレーターが質問を整理しながら進行しました。多国籍チームであるKUISCと連携することで、学生の視点をより反映したプログラムとなりました。

参加者からは、縦と横のつながりが得られたことへの評価とともに、本企画の継続を望む声が多く寄せられ、盛況のうちに終了しました。



ネットワーキングセッションの様子



グループに分かれての交流



会場の様子



集合写真

(成長戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

令和7年度「STEM girl ～中高生のための理系女子 mixer～」を実施

教育改革戦略本部附属高大接続・入試センターでは、新たな女子生徒・女子高校支援事業の一環として「STEM girl ～中高生のための理系女子 mixer～」を、2025年11月1日(土)に、高槻中学校・高等学校コナコピアホール(大阪府高槻市)にて開催しました。本イベントは、工

大学の
動き

藤 剛 高槻中学校・高等学校長からの助言と、同校教員の支援および協力を受けて実施されました。当日は高校生とその保護者を中心に212名の聴講があり、中学生や他府県の高校関係者も参加しました。

本学からは、野崎治子 理事（広報担当）が「しなやかに！ したたかに！ しぶとく!!」をテーマに基調講演を行いました。幼少期から学生時代、社会人生活を振り返って、軽妙なエピソードを交えてメッセージを送りました。参加者からは「自らのキャリア形成をジャングルジムに例えて、その場その場で縦横無尽にできることをやってきたという姿勢に勇気づけられました」、「社交的でなくても、ファーストペンギンの精神と行動力で、他者との関係を築くことができると伺い安心しました」などのコメントが寄せられました。

今回の企画に参加した中学生・高校生には、『やってみたくかも』と思ったことに何度でも挑戦して、失敗してくじけそうな仲間には背中をそっと押してあげられるような」レジリエンスを育みつつ、「いつか『理系女子』という言葉が特別なものではなく、誰もが当たり前さまざな分野で活躍できる時代」を一人ひとりが切り開いていけるよう、これからの学生生活を大切に過ごしてもらうことを期待しています。

同センターでは、今後も、果敢に挑戦を続ける高等学校などと協働し、先駆的な高大接続・高大連携活動を展開していきます。



工藤校長による開会挨拶



基調講演「しなやかに！したたかに！しぶとく!!」



野崎理事による基調講演



会場の様子

(教育改革戦略本部)

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

生理用品設置支援事業を開始

本学では、DEIB（ダイバーシティ・エクイティ・インクルージョン&ビロッキング）推進の一環として、学生や教職員が安心して過ごせる環境整備を目的に、学内トイレへの生理用品の設置を進めています。

この取り組みは、学生、教職員のニーズや学生有志の活動がきっかけとなったものであり、2025年3月～5月には、吉田キャンパスおよび桂キャンパスの一部トイレで試行設置を行いました。

その後、試行設置におけるアンケートを通じて、補充頻度や利用ニーズなどの運用課題を調査したうえで、今年度新たに、部局が自主的に生理用品を設置する際の費用を大学が支援する「生理用品設置支援事業」を開始しました。

現在、人間・環境学研究科、理学研究科、工学研究科など、複数の部局が支援制度を活用し、女性トイレや多目的トイレでの常設提供を始めており、今後、全学的な整備を目指します。

【関連リンク】

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/news/2025-11-21>

(人事部(職員育成課))

[目次に戻る ↗](#)



生理用品設置の様子

令和7年度「人権に関する研修会」を開催

本学人権委員会は、「人権に関する研修会」を、2025年12月8日(月)に百周年時計台記念館およびオンラインにて開催し、約430名の教職員および学生が受講しました。

本研修会は、人権委員会の活動の一環として毎年開催しています。今年度は、小林広典 ANAビジネスソリューション株式会社常務取締役による「カスタマーハラスメントに対応するための仕組みと体制づくり～従業員と企業ブランドを守るために～」というテーマの講演を実施しました。

講演では、まず、クレームとカスタマーハラスメントの違いや、カスタマーハラスメントへの対応を行うために必要な準備について説明されました。そのうえで、組織的にカスタマーハラスメントへの対応を行うにあたって、仕組みや体制をどのようにすればよいか実例を交えながら解説されました。また、カスタマーハラスメントの加害者にならないためのポイントについての話もありました。

受講者は講演内容に熱心に聞き入っており、講演後は講師と受講者との質疑応答も活発に行われ、充実した研修会となりました。



小林常務取締役による講演

(コンプライアンス部(人権室))

[目次に戻る ↗](#)

大学の
動き

令和7年度定年退職予定教員

京都大学教員定年規程により、教員67名(教授53名、准教授11名、助教3名)が令和8年3月31日付けで退職の予定です。

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
文学研究科	木津 祐子	文献文化学専攻 東洋文献文化学講座	中国近世語学史、特に琉球・長崎で学ばれた中国語と通事に関する研究
	小山 哲	歴史文化学専攻 歴史文化学講座	東中欧史、特に近世のポーランド・リトアニア共和国の国制・社会・文化に関する研究
	ミツヨ・ワダ・マルシアーノ	京都大学・ハイデルベルク大学国際連携文化越境専攻文化越境講座	映画・メディア研究 ドキュメンタリー研究 女性・ジェンダーマイノリティ映画研究 映像アーカイブ研究
	千葉 豊	附属文化遺産学・人文知連携センター	西日本縄文時代文化史に関する研究
教育学研究科	松下 佳代	教育学環専攻 教育・人間科学講座	教育方法学、大学教育学 特に、高等教育、初等・中等教育における能力、学習、評価に関する研究
法学研究科	塩見 淳	法政理論専攻 刑事法講座	刑法に関する研究
経済学研究科	西山 慎一	経済学専攻 市場動態分析講座	マクロ経済学、租税社会保障政策、家族の経済学、数値計算経済学
理学研究科	原田 雅名	数学・数理解析専攻 多様体論講座	高次元(∞ 圏)でのホモトピーファイバーの研究モチーフ
	穴倉 光広	数学・数理解析専攻 解析学講座	力学系理論に関する研究
	池田 隆介	物理学・宇宙物理学専攻 物性基礎論講座	凝縮系理論、具体的には磁場下の超伝導の基礎理論の構築、新奇超流動相の理論的研究
	佐々木 豊	物理学・宇宙物理学専攻 物質物理学講座	超低温における量子凝縮相・量子液体固体ヘリウムの研究
	山本 潤	物理学・宇宙物理学専攻 量子光学講座	光・力学・電磁場によるソフトマターの時空間構造解析と物性発現機構の実験物理学研究
	向川 均	地球惑星科学専攻 大気圏物理学講座	気象学に関する研究
	下林 典正	地球惑星科学専攻 地球物質科学講座	輝石などの造岩鉱物の相関係や相転移に伴う微細組織形成に関する実験的研究 稀産鉱物の記載鉱物学的研究
	高橋 淑子	生物科学専攻 動物科学講座	脊椎動物の個体発生における形づくりの研究
	中川 尚史	生物科学専攻 人類学講座	野生霊長類に関する社会・生態学的、行動学的研究
	田村 実	生物科学専攻 進化植物科学講座	植物系統分類学に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
理学研究科	大 沢 信 二	附属地球熱学研究施設	「地球流体化学」、分析化学的手法による温泉と火山の研究、温泉が関わる水圏環境の研究・分野横断研究
	古 川 善 紹	附属地球熱学研究施設	地球内部のダイナミクスに関する研究
医学研究科	伊 佐 正	医学専攻 高次脳科学講座	感覚・運動機能とその障害後の機能回復機構、意思決定・意識・注意などの認知機能の神経回路機構、精神神経疾患の神経回路機構に関する研究
	松 田 文 彦	附属ゲノム医学センター	大規模ゲノムコホートをを用いた予防医学研究、多因子型希少難治性疾患のゲノム・オミックス解析、バイオインフォマティクスを用いたゲノム疫学データベースの開発
薬学研究科	竹 本 佳 司	薬科学専攻 薬品創製化学講座	有機分子触媒に関する研究
	加 藤 博 章	薬科学専攻 薬品機能統御学講座	タンパク質の立体構造と作用機構に関する研究
	竹 島 浩	薬科学専攻 生体分子薬学講座	細胞内 Ca ²⁺ シグナルの分子構築と生理機能に関する研究
工学研究科	大 崎 純	建築学専攻 建築構造学講座	建築骨組、大空間構造と張力構造の力学特性、安定性と幾何学的特性を考慮した解析、設計と最適化
	花 崎 秀 史	機械理工学専攻 流体理工学講座	流体力学、成層・回転流体中の乱流および非線形波動に関する研究
	高 木 郁 二	原子核工学専攻 量子ビーム科学講座	核融合炉プラズマ対向壁の水素リサイクリングに関する研究 原子炉燃料被覆管の健全性に関する研究
	乾 晴 行	材料工学専攻 材料物性学講座	金属および金属間化合物材料の結晶塑性に関する研究
	三 浦 清 貴	材料化学専攻 無機材料化学講座	超短パルスレーザーによる物質内部の局所選択的な誘起構造形成に関する基礎および応用研究
	大 江 浩 一	物質エネルギー化学専攻 基礎物質化学講座	有機活性種の反応性制御に基づく有機合成手法の開発ならびに生体用造影剤の機能創成と応用に関する研究
	白 川 昌 宏	分子工学専攻 量子機能化学講座	磁気共鳴による生体分子の構造機能解析ならびに生体計測に関する研究
	濱 地 格	合成・生物化学専攻 生物化学講座	分子夾 <small>きょう</small> 雑の生命化学に関する研究
農学研究科	井 鷲 裕 司	森林科学専攻 森林環境科学講座	森林生態系の生物多様性評価・保全に関する研究
	寺 内 良 平	応用生物科学専攻 資源植物科学講座	栽培植物の起原および進化に関する研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
農学 研究科	熊 谷 元	応用生物学専攻 動物機能開発学講座	未利用資源の飼料化に関する研究 熱帯地域における家畜・飼料資源 開発 環境負荷の少ない飼養管理法の提 案
	佐 藤 健 司	応用生物学専攻 海洋生物学講座	食品中のペプチドを摂取した後の 代謝とその機能、生体内でのアル デヒドの生成とその抑制
	沈 金 虎	生物資源経済学専攻 国際農林経済学講座	中国の農業・農村・農民問題と日本・ EU・アメリカの農業保護政策に関 する研究
人間・環境学 研 究 科	櫻 川 貴 司	人間・環境学専攻 数理・情報科学講座	数理論理学のプログラミングへの 応用、プログラミングの意味論、 自然言語処理、複雑ネットワーク、 強化学習
	林 達 也	人間・環境学専攻 認知・行動・健康科学講座	骨格筋代謝の活性化メカニズムと その臨床応用に関する研究
	河 崎 靖	人間・環境学専攻 言語科学講座	印欧語・オーストロネシア語の世 界を視野に収めながら史的言語学 の方法論を用いた言語体系の通時 的考究
	小山田 明	人間・環境学専攻 物質科学講座	フラストレート磁性体の研究
	幡 野 恭 子	人間・環境学専攻 地球・生命環境講座	緑藻の形態形成に関する細胞生物 学的研究
エネルギー科学 研 究 科	今 谷 勝 次	エネルギー変換科学専攻 エネルギー機能設計学講 座	連続体力学に基づく複雑固体の力 学体系とモデリングに関する研究
アジア・アフリカ 地域研究研究科	竹 田 晋 也	東南アジア地域研究専攻 生態環境論講座	熱帯アジアにおける森林資源の利 用と管理に関する地域研究
	伊 谷 樹 一	アフリカ地域研究専攻 生業生態論講座	アフリカの生業と環境の動態に関 する研究
	東 長 靖	グローバル地域研究専攻 イスラーム世界論講座	スーフイズム(イスラーム神秘主義) 研究、イスラーム思想研究、イス ラーム世界研究
情報学研究科	山 本 章 博	情報学専攻 認知システム講座	数理論理学・形式言語理論・離散 構造データを用いた機械学習と知 識発見方式に関する研究
	木 上 淳	情報学専攻 応用解析学講座	解析学
	面 原 修	情報学専攻 人間機械共生系講座	自動車の動力学と運動制御に関す る研究、機械力学に関する研究
生命科学研究科	白 石 英 秋	統合生命科学専攻 遺伝機構学講座	微細藻(特に、食用シアノバクテ リアであるスピルリナ)の基礎研 究とその育種のための基盤技術の 整備
	松 本 智 裕	高次生命科学専攻 ゲノム生物学講座	染色体の均等分配に関わるセント ロメアの構造と、細胞周期制御機 構の研究

大学の
動き

部 局	氏 名	講 座 等	研 究 分 野 等
化学研究所	辻 井 敬 亘	材料機能化学研究系	精密重合化学と界面科学を基盤とした高分子材料設計・機能開拓に関する研究
人文科学研究所	稲 葉 穰	文化構成研究部門	中央アジア古代史、特に歴史的アフガニスタンにおける文化接触と変容の研究
	小 関 隆	文化連関研究部門	イギリス・アイルランド近現代史の研究
医生物学研究所	秋 山 芳 展	生命システム研究部門	細菌細胞表層タンパク質の動態の研究
	三 浦 智 行	附属感染症モデル研究センター	非ヒト霊長類を用いた感染症モデルの構築と病原性の解明および予防治療法の開発
エネルギー理工学研究所	大 垣 英 明	エネルギー生成研究部門	中赤外自由電子レーザーおよびレーザー逆コンプトン散乱ガンマ線の発生と利用に関する研究
生存圏研究所	山 本 衛	生存圏診断統御研究系	レーザー観測等による大気圏・電離圏の研究
防災研究所	寺 嶋 智 巳	地盤災害研究部門	斜面水文学と電磁気学の融合による表層崩壊予測に関する研究
数理解析研究所	河 合 俊 哉	無限解析研究部門	場の理論および弦理論の数理的研究
	大木谷 耕 司	応用数理研究部門	流体力学 特に、乱流理論の基礎としての渦運動力学の研究
複合原子力科学研究所	三 澤 毅	原子力基礎工学研究部門	原子炉物理に関する研究
	藤 川 陽 子	原子力基礎工学研究部門	放射能および微量有害物質の環境動態の研究および環境修復技術の開発
生態学研究中心	石 田 厚	生態学研究部門	植物の生理生態学分野 特に熱帯林や亜熱帯林における樹木の乾燥耐性や適応の仕組みを解明する研究
総合博物館	永 益 英 敏	研究部 資料開発系	植物分類学、熱帯植物学に関する研究
国際高等教育院	谷 村 吉 隆	化学教室	開放系の量子力学に基づく化学物理理論の研究
	鹿 内 利 治	生物学教室	光合成電子伝達の制御に関する研究 葉緑体遺伝子発現制御に関する研究

(人事部(人事企画課))

[目次に戻る ↗](#)



フィールド科学教育研究センターが、京都情報大学院大学 および京都コンピュータ学院と連携協定を締結

フィールド科学教育研究センターは、2025年10月30日(木)に、学校法人情報大学 京都情報大学院大学 (KCGI) および京都コンピュータ学院 (KCG) と、IT分野とフィールド科学の融合を目指した連携協定を締結しました。本協定は、同センターが提唱する学問領域「森里海連環学」に関し、相互に連携・協力して、情報通信技術の応用の取り組みを進め、教育・研究・社会連携活動の発展に寄与することを目的としています。

協定締結式では、館野隆之輔 フィールド科学教育研究センター長と長谷川 亘 KCGI・KCG 総長が協定書に署名しました。館野センター長からは、フィールド調査や自動観測、調査地や標本の管理、データ解析など、さまざまな研究の場面でITが必要になることが説明されました。長谷川総長からは、KCGI・KCGの歴史を踏まえて、KCGIの歴代学長が全員京都大学出身であることなど、京都大学との関係性について紹介があり、お互いのニーズと強みを生かして連携していきたいと挨拶がありました。



協定締結式の様子



左から、長谷川総長と館野センター長



館野センター長による連携内容の説明



長谷川総長による挨拶



参加者の集合写真



多川教授による記念演奏



続いて、質疑応答の時間があり、大学間連携の現状や協定締結に至った経緯、双方の研究活動に関する記者からの質問へ回答しました。最後に、国際的ピアニストの多川響子 KCGI 教授による記念演奏があり、協定締結式はなごやかに終了しました。

今後、双方の強みを生かして、市民や自治体、IT 関連企業など多様なステークホルダーと連携して、超学際的な研究を推進していきます。

(フィールド科学教育研究センター)

[目次に戻る ↗](#)

2025 年度宇治キャンパス若手研究者交流会を開催

宇治キャンパスでは、2025 年 10 月 16 日 (木)、各研究所の枠を超えた宇治キャンパス全体の若手研究者の交流機会として、「宇治キャンパス若手研究者交流会」を生存圏研究所木質ホールにて開催しました。

本交流会は、2022 年 10 月の「京都大学宇治キャンパス公開 2022」の際に実施した、湊 長博 総長と宇治キャンパスで活動する 4 研究所の若手研究者との座談会が好評であったことを受け企画されたもので、3 回目の開催となる今年は、交流会となって初めて総長が参加しました。

交流会には、発表および議論に参加する 16 名の若手研究者のほか、約 80 名の研究者と学生が参加しました。片平正人 エネルギー理工学研究所長の司会により、それぞれの研究所を代表して、加藤真理子 化学研究所助教、金 史良 エネルギー理工学研究所助教、謝 怡凱 生存圏研究所講師、中山雅之 防災研究所助教の 4 名が研究内容を紹介するプレゼンを行いました。その後は多様な研究分野の視点から活発な質疑応答が行われ、交流を深める機会となりました。



加藤助教



金助教



謝講師



中山助教



全体の様子

部局の
動き



フリートークの様子



湊総長の講評

続くフリートークでは、時任宣博 副学長から若手研究者に質問があり、その後の湊総長による講評、島川祐一 化学研究所長による挨拶で交流会は締めくくられました。

交流会終了後は、宇治キャンパス公開懇親会の会場に移動し、和やかな雰囲気の中、研究所の枠を超えた自由な交流が行われました。

(宇治地区事務部)

[目次に戻る ↗](#)

AI時代の企業と大学

小島 啓二



生成AIの進歩は劇的で、人類の言語的な知的能力を超えるAIである「超知能」の実現が現実味を帯びてきた。人類が超知能を使いこなしてより優れた社会を築くという楽観論から、超知能が人類を支配するディストピアになってしまうといった悲観論まで、多様な未来が語られている。

しかし、現実の企業社会においてAIは、長期的な社会設計の文脈よりも、短期的な利益成長を実現するための競争手段として導入されつつある。AIバブルへの懸念が示すとおり、多くの企業は技術の成熟や影響評価を待つことなく、AI導入競争に乗り遅れまいと必死である。AIに対する企業の前のめりの姿勢は、成功への希望であると同時に、明確な危うさを孕んでいる。

おそらくAIそのものが問題なのではない。問題はAIが最適化する対象、すなわち企業の目的関数が、短期的な経済価値の最大化に強く偏っている点にある。欲深さや狡猾さ、自己正当化などの「人間の愚かさ」は、高度な知性と結びついて発現することが多い。AIは人間の愚かさを矯正する存在ではなく、与えられた目的を忠実かつ高速に実行する装置と考えるべきである。不適切な目的関数のもとでAIが企業行動の合理性を追求すれば、結果として社会的危険性を増幅させる可能性は高い。

この状況において求められるのは、従来型のコーポレートガバナンスの延長ではない。不正や逸脱を監視・抑止するモニタリング中心のガバナンスから、何を競わせ、何を最適化させるのか自体を事前に設計するガバナンスへの転換が必要である。競争は進歩を生み出すが、それは競争の目的関数とルールが適切に設計されている場合に限られる。AI時代には、この競争設計そのものが社会的な課題であろう。

ここで大学の役割が決定的に重要となる。大学は短期的市場競争から独立し、長期的な価値の視点を基盤とする貴重な存在である。率直に言って大学が企業に倫理を説いても、彼らは異なる目的関数で経営をしているわけで、聞く耳を持つ向きは少ないであろう。大学の本領は、AI時代のガバナンスにおける目的関数や評価軸を、学術的知見に基づいて設計・検証することにあるのではなかろうか。すなわち、大学は長期的観点から社会全体の意思決定構造を再設計する、知的インフラとなるべきである。

AI時代の最大のリスクは、企業が賢くなりすぎることではない。適切とはいえない目的関数のもとで、あまりにも合理的に行動できるようになることである。その合理性を社会にとって望ましい方向へ導くために、大学が果たすべき役割は今後ますます大きくなる。AIという新たな装置を前に、私たちはまず、それを使いこなす側の知的インフラを大学が中心になって成熟させなければならない。

(こじま けいじ、株式会社日立製作所副会長、
昭和 57 年大学院理学研究科修士課程修了)

[目次に戻る ↗](#)

随想

点滴穿石 共創
多くの仲間と共に

名誉教授 橋田 充



薬学は大きくは応用の科学である。応用の場は医療と創薬にあり、私は創薬研究の一翼を担う薬物投与方法論を研究する薬剤学を専門領域としてきた。薬物の治療効果を支配する主要因子の一つがその体内動態であり、これは投与方法と製剤、剤形によって定まる。私はこの薬物体内動態の精密制御を通じて最適な治療効果の発現を目指す投与方法、ドラッグデリバリーシステム (DDS) の思想や開発方法論の構築、敷衍に50年余携わってきた。この間医薬品は、低分子化合物、高分子、抗体等機能性タンパク質、核酸、遺伝子、生細胞へとモダリティを大きく変化させてきたが、それぞれの体内動態の解析、特性の系統的整理に携わり、優れた治療効果発現が期待されるDDS技術の創出に関わることができたことは、大きく言えば各時代の医薬品開発、共創においてその水先案内人を務めたと言えよう。

先日私の叙勲に合わせ研究室出身者が集まる機会があり、その場で私に功績があるとすればそれは特定の発見や発明にではなく、この間教室在籍者がみんなで積み重ねた情報・知識・技術の集大成・体系にあると述べさせていただいたが、その後坂口志文先生と北川進先生のノーベル賞受賞という素晴らしい報に接し、改めてこの思いを噛みしめた。私は京都大学に1970年に入学したので両先生と同期生であり、入学早々教養部の長期ストライキという波乱の幕開けに直面した。このとき薬学部では新入生を集め、教授をはじめとする先生方がそれぞれの専門研究分野の概論あるいは領域の最新の話題を聞かせてくださるとともに、個人的な接触の機会をも与えていただいた。以後の私の歩みを振り返るとき、このearly exposureがどのような意味を持ったのか、また今回の御受賞に際しお二人が“運鈍根”に触れたことも私の教養部時代のおぼろげな記憶と重なり、大学入学から研究者の卵がどの様に孵化し育ったのか、今接している若い研究者の成長と重ね合わせて思うところが多々ある。

現在の私は、専門を離れてレギュラトリーサイエンスという研究領域に関わり、そこで学会の理事長や行政との橋渡し役を務めさせていただいている。広く科学技術の成果を社会に実装することを最終目標に据える本領域は、身の回りの物質や現象の量的質的実態およびそれが人体や社会に与える影響を的確に予測・評価する方法を確立して、その成果に基づき国民の健康と社会の発展に資することを目指す、科学的知見と規制などの行政施策・措置との間の橋渡しを担う研究分野であり、医薬工農学などの幅広い学問分野・領域を活動の場とする。応用研究としては、成熟に近づいたステージにあると言えるか。

人生100年時代と言われる今日、過去を振り返るにはまだ早いかも知れないが、時系列に沿った自らの研究の進展、また研究や活動領域の横展開を俯瞰するとき、多くの仲間と築いた共創の足取りを改めて思う次第である。

(はしだ みつる、平成29年退職、元大学院薬学研究科および
高等研究院物質-細胞統合システム拠点教授、現同拠点特任教授、専門は薬剤学)

[目次に戻る ↗](#)

洛書

先達の知見

樋口 裕美子



動かない植物が示す多様な形態が、植物を利用する動物との相互作用にどのような影響を及ぼすのかに関心を持ち、研究しています。特に興味を持っているのが植物の葉の形で、主な対象としている動物は、産卵の際に葉を巻いて子どものための揺籃（葉巻）をつくる甲虫、オトシブミ類です。ご存じの方もいるかもしれませんが、オトシブミ類はメス成虫が葉を切り、折り、巻くといった加工を行い、幼虫が育つための揺籃を作ります。自分の身体の数十倍もある、形も大きさも一定ではない葉で巧みに葉巻をつくり上げてしまう姿には少なからず驚かされます。加工行動の理解を手がかりに、葉の形が昆虫の加工行動にどのように影響するのか、“虫目線”で考えたら生物間相互作用における植物の形態の新しい意義がわからないかと思っています。

オトシブミ類の生態や行動は、日本の昆虫学者や生態学者、昆虫愛好家によって比較的良好に記されてきました。博士課程から植物と植食者の関係を研究し始め、オトシブミ類を扱うようになった私は、こうした先達の知見に大いに助けられました。例えば、各地の昆虫採集記録は、どういうオトシブミ種がどういう植物種を使っているのかがわかり、有用です。また、河野広道博士の『森の昆虫記2-落とし文篇-』などは昆虫学者からみたときのオトシブミたちの行動の詳細が温かい筆致で書かれ、一緒に観察している気分になります。

葉の形態に注目したオトシブミ類の記述もいくつか知られますが、特に印象に残っているのが、高橋良一博士が1928年に著した『動物学雑誌』の台湾産オトシブミ類の報告です。博士は、台湾で普遍的なある1種が幅広い植物を利用するにもかかわらず、選ばれる葉の形がよく似ている点に注目し、「此昆虫が葉の成分よりも、葉の物理的性質に支配される方が大きいことを示すものではあるまいか」と述べています。真偽はわかりませんが、現地での観察をもとにした考察を、100年近く経て受け取っていることに強い印象を受けました。当時、自分の仮説に自信がなかった私は、思いがけず賛同者を得たようにも感じました。

このような体験は、多くの人にあてはまると思います。論文や書籍を読んでいると、見も知らない過去の研究者が自分と同じような印象や疑問を抱いており、親しみを感じることがあります。残された報告や著作は、それぞれの研究者の仕事のごく一部であり、記述は必ずしも正確でないかもしれませんが、しかし、こうした記録が後の研究者を刺激し、著者の意図を超えて新しい問いや研究を生み出すきっかけになることもあるでしょう。私もそうした流れのなかの一員として、日々の研究や観察を丁寧に記録し、残していきたいと思っています。

(ひぐち ゆみこ、生態学研究センター、専門は植物生態学・植物-動物相互作用)

[目次に戻る ↗](#)

栄誉

野田 進 高等研究院副院長・特別教授がランク賞を受賞

2025年12月2日(火)、野田 進 高等研究院副院長・特別教授が、フォトニック結晶レーザー(PCSEL)の概念の創出と実現についてランク賞を受賞することが決定しました。

ランク賞は、イギリスの実業家であるJoseph Arthur Rank卿が1972年に創設した賞です。Rank卿が、人類にとって極めて重要な貢献を果たすと考えた、オプトエレクトロニクス(光エレクトロニクス、視覚科学等)および栄養学(ヒトと動物の栄養学、農作物学等)の2部門において、初期の着想から、その実現、さらには応用展開を経て、人類に利益をもたらした、あるいは将来的に利益をもたらす可能性のある研究成果を対象として、隔年で授賞者を選出しています。これまでの受賞者は後にノーベル賞を受賞するなど、世界的に権威ある賞として認知されています。

授賞式は、2026年6月にイギリスで実施される予定です。

(高等研究院)

[目次に戻る ↗](#)



川合康三 名誉教授が日本学士院会員に選定

2025年12月12日(金)、川合康三 名誉教授が、日本学士院会員に選定されました。

日本学士院は、学術上功績顕著な科学者を優遇するための機関として文部科学省に設置されており、学術の発展に寄与するため必要な事業を行うことを目的としています。

川合名誉教授は、著作において、西暦800年を中心とする前後70年ほどの中唐期の文学が人間の精神の領域を画期的に拡大させたことを提唱するなど、近年の学界における中唐文学研究隆盛に大きく貢献しました。

【関連リンク】

主要な学術上の業績などは、以下のWebサイトをご参照ください。

<https://www.japan-acad.go.jp/japanese/news/2025/121201.html>

(大学院文学研究科)

[目次に戻る ↗](#)



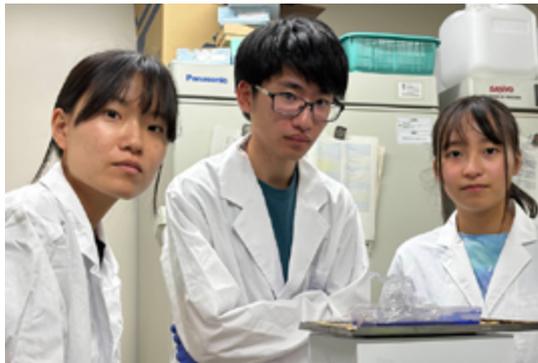
話題

学部生の研究チーム「iGEM Kyoto」が合成生物学の国際大会「iGEM 2025」で金賞を受賞

京都大学の学部生による研究チーム「iGEM Kyoto」が、2025年10月28日(火)から31日(金)までフランス・パリで開かれたiGEM 2025 Grand Jamboreeに出場し、金賞を受賞しました。これにより、チームとしては2023年から3年連続、また出場しなかった年を除くと2019年・2021年を含めた5大会連続の金賞となります。

iGEM (International Genetically Engineered Machine Competition) は、2003年に米国で始まった世界最大規模の合成生物学の学生研究コンテストです。今年のパリのポルトベルサイユ国際展示場を会場に、世界50以上の国・地域から400を超えるチームが参加し、5,000名を超える参加者が研究成果を競いました。

iGEM Kyotoは2008年に結成されたチームで、今年で15回目の出場となりました。今年度は、プロジェクト「Avisptosis」に取り組み、高病原性鳥インフルエンザのまん延を合成生物学で阻止する研究を行いました。遺伝子組み換え実験に加え、数理モデリング、社会実装、市場調査など、幅広い活動が高く評価されました。



実験室での様子



セミナー室での勉強会



会場での集合写真



会場での発表の様子

(医生物学研究所)

[目次に戻る ↗](#)

令和7年度総長杯ボウリング大会を開催

2025年11月21日(金)と28日(金)の両日、いずれも午後6時30分から、ROUND1京都河原町店にて、令和7年度総長杯ボウリング大会を開催しました。今年は44チームの参加申し込みがあり、昨年に引き続き2日間での開催となりました。会場ではストライクやスペアなどの

話題

好プレーのたびに大きな歓声が上がリ、和気あいあいとした雰囲気の中、参加者の笑顔はじける楽しい大会となりました。

大会結果は次のとおりです。

<団体>

優勝：医学部附属病院「2区」（1,220ピン）

準優勝：医学部附属病院「チーム・ズンズズ」（1,200ピン）

<個人>

優勝（男性）：川俣 昭（フィールド科学教育研究センター・385ピン）

優勝（女性）：岡本 麻衣子（医学部附属病院・413ピン）



優勝チーム：2区（医学部附属病院）



準優勝チーム：チーム・ズンズズ（医学部附属病院）



個人優勝者（男性の部）の川俣さん（左から2人目）



個人優勝者（女性の部）の岡本さん（後列左側）

（人事部（人事企画課））

[目次に戻る ↗](#)